

患者が抱く薬剤に対する 不安への対応について

虎の門病院

薬剤部長 林 昌洋

●薬物療法の「安全」と「安心」の違い●

薬物療法は、薬物の効果が生命あるいは健康にもたらすベネフィットと、薬物の有害反応による健康被害やQOLの低下などのリスクのバランスの上に成り立っています。薬剤師であれば誰もが知っていることですが、投薬した全ての患者に有効な薬は存在しませんし、副作用のない薬も存在しません。薬剤師は、薬物療法の安全と安心のために日々業務を行っていますが、安全と安心は大きな違いがあることを意識されたことがあるでしょうか。書籍や辞書を調べてみると、「安全」とは「危険がないこと」「危険がない現実の状態」などの記載が見つかります。一方、「安心」については「心が安らぐこと」「不安、心配のない心の状態」との解説が認められます。つまり、安全は現実の状態、安心は心の状態であることが理解できます。

薬物療法の「安全」は現実の問題ですから、処方、調剤、監査、施用などの、医療現場において危険を取り除く活動を進めることにより実現できます。一方、「安心」は患者さんの心の中の安らぎです。心の中の不安や心配を取り除くコミュニケーションが必要になります。患者さん自身がリスクを正しく理解し受け止めて、心の中で受け入れ対応ができていないと実現しないことになります。

虎の門病院では、患者さんが入院されると直ちに病棟薬剤師が面談して持参薬を確認し、入院中の処置を勘案して服薬に関する処方提案をするとともに、医師と薬剤師が開発したアレルギー歴抽出・判定プロトコールにより、薬剤師がアレルギー歴を確認し電子カルテにアレルギー薬の処方禁止登録を行います。このアレルギー薬処方禁止登録によって、既知のアレルギー薬は処方されなくなりますので、危険が取り除かれ安全に一步近付いたこととなります。

薬剤師がアレルギー歴のある薬を処方できないようにカルテに手続きしたことを患者さんにお話しすることは、現状認識と情報共有をすることになり患者さんの安心に一步寄与すると考えられます。入院時の患者面談で薬剤師は患者さんの服薬に関する問題点を評価

し、薬学的に支援すべき内容に関して考察します。この記録をさかのぼって解析すると、入院患者の17%は薬の効果を実感できておらず、15%は薬の服用開始後に副作用と特定できてはませんが何らかの体調変化を自覚しています。また、薬に関して質問したいと感じている方が12%存在しており、4%の方が服薬に不安を感じていらっしゃるのことがわかります。こうした患者さんに対応して、病棟薬剤師は、効果が実感できていない方の薬効評価とご本人へのフィードバック、体調変化と副作用の評価やご本人へのフィードバックをはじめとして患者さんの薬の疑問に答えて、不安を解消していくことになります。

●がん化学療法における不安の解消●

重篤な副作用がしばしば発現するがん化学療法に際して、患者さんはがんによる健康や生命の問題と、抗がん剤による副作用の問題と向き合わなければなりません。望まない健康上の問題や副作用に関する情報は患者さんを不安に陥れることがあります。

話は少し変わりますが、皆さんは旅先で、目的地までの道のりが行きは遠かったのに、帰り道は思ったより近かったという記憶がおありではないでしょうか。人は初めての出来事や初めての道のりに出くわしたとき、慎重になりますし不安にもなります。しかし、一度経験して理解していると、不安は解消し客観的に情報処理することができるようになります。

がん化学療法においても同じことがいえます。患者さんは漠然としたリスクを不安に思うのではなく、薬剤師が平易に解説した副作用の発現頻度や副作用の重篤度、そして副作用は予防したり重篤化回避できることをお話し、いつも薬剤師がそばにいて相談に乗ったり副作用の回避策を医師と協議していることをお話します。虎の門病院でがん化学療法を受ける患者さんの不安の程度や、化学療法のスケジュールに関する理解度を調査したところ、薬剤師による面談と支援により63%の患者さんは不安が軽減したことが確認されています。がんと診断されたこと、副作用のある抗がん剤治療を開始することから、34%の患者さんで不安の程度に変化はなかったことも無理もないことと思います。いずれにしても、薬の生命やQOLに及ぼす効果と、副作用ならびに副作用対策を知って患者さんは治療と向き合う心構えができたことは間違いのない事実です。

漠然としたリスク意識や抽象的なリスク感は不安につながりますが、客観的にリスクを理解して、リスクを予防する措置が取られていること、リスクを管理する薬剤師がそばに知っていることを知っていただくことにより、不安が軽減し解消した方がいらっしゃるのことがわかります。

●Relative riskとAbsolute riskの使い分け●

リスクを評価し理解する手法に、Relative risk、いわゆる相対リスクと、Absolute risk、いわゆる絶対リスクの考え方があります。リスクや効果を強調して認識する場合には、Relative riskが用いられることが多いようです。

たとえば、ある薬物が心筋梗塞のRelative riskを50%削減した事実があるとします。元々の心筋梗塞発症率が40%の患者集団であれば、Relative riskの50%削減は、100人中20人の患

者が救われることとなります。一方、元々の心筋梗塞発症率が2%の患者集団であれば、Relative riskの50%削減は、100人中1人の患者しか救えないことを意味しています。しかし、いずれの場合でもRelative riskの50%削減というと、魅力的に聞こえますし理解されます。

リスクの場合は、この逆の現象が発生し、Relative riskはリスクを強調する手法となり、Absolute riskはリスクを客観的に理解することを助けるコミュニケーション手法となります。

妊婦さんが服薬した薬が胎児に先天異常を引き起こすリスクがあるか否かについて説明する際は、薬を使用していない健康な妊婦さんにおける先天異常の発現率2~3%と比較して、薬のリスクをAbsolute riskで説明して客観的な理解を支援することが基本となります。

「薬を使用していない母親グループのお子さんに先天異常が認められることが100人中3人、この薬を使用している母親グループのお子さんに先天異常が認められるのも100人中3人です。薬によるリスク増加は認められていません」とお話しすることにより妊婦さんは現実のリスクを理解し不安が解消します。

●患者の不安な気持ちを尊重することが重要●

書籍、マスコミ、インターネット、知人、家族、医療関係者からの情報、いずれも患者さんにとっては情報です。薬剤師は、専門の学術雑誌に掲載された臨床論文を、批判的に吟味しバイアスや交絡因子の影響を評価して判断します。一方、国民の皆さんは、こうした専門的な評価に必要な知識やトレーニングを受けていません。いずれの情報も同じインパクトで受け止めて、不安になる傾向があります。私たち薬剤師はどのように対応するのがよいでしょうか。次にポイントをまとめてお話しします。

まず、面談環境を整えます。会話が漏れ聞かれてしまうリスクのない部屋を手配します。薬剤師は面接を通してプロフェッショナルな物腰や表情を維持し、礼儀正しく、敬意を表して、接する必要があります。

そして大切なのは、不安や不安に至った状況についての判断を直ちに行うことではなく、患者の苦痛に親身になって寄り添うことが大切です。患者の言葉を軽視したりしないように配慮して「心配しないで大丈夫」と言ってしまう誘惑を我慢しなければなりません。短絡的な発言は、患者の悩みや不安を軽視している印象を与えてしまうからです。

もちろん薬剤師が科学的に確信を持っていなかったり、躊躇したり、口ごもったりすることは、信頼関係を損なう可能性があります。大切なことは、患者の不安な気持ちは尊重され、面談している薬剤師にとっても重要な問題として認識されていることを患者に伝えて、一緒に客観的にリスクと向き合う準備があることを共有することです。

薬剤師には、患者が抱く薬剤に対する不安を軽減あるいは解消し、薬のベネフィットを最大に、リスクを最小にするための専門知識があり、医療人として患者さんを支える心の準備があることを自然と理解してもらえる関係構築が、信頼の第一歩であり、不安解消の近道と考えられています。